

## ポール・クローデルの日本観と大正天皇崩御：「ミカドの葬儀」を中心に

学谷, 亮  
中京大学教養教育研究院：講師

<https://doi.org/10.15017/4752576>

---

出版情報：Stella. 40, pp.201-215, 2021-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン：  
権利関係：

# ポール・クローデルの日本観と大正天皇崩御<sup>\*</sup>)

——「ミカドの葬儀」を中心に——

学 谷 亮

はじめに

1926年（大正15年）12月1日、当時フランス大使として日本に駐在していたポール・クローデルは、次の任地がアメリカ合衆国に決定したことを知らされ、離日は翌年1月11日に予定された<sup>1)</sup>。しかし、実際にはこの日程は約1カ月延期される。その直接的要因となったのが、12月25日の大正天皇崩御である。クローデルは、翌1927年（昭和2年）にフランス大統領の代理として大正天皇の大喪儀に参列することになり、これが駐日大使としての最後の任務となった。

滞日中、クローデルは多忙な外交官生活の合間を縫い、日本文化に触発されたテキストを数多く執筆した。それらは主題もジャンルもきわめて多様であるが、大半は1927年刊の『朝日の中の黒鳥』に収録されることになる。しかし、そこには加えられなかったテキストが数篇存在し、そのひとつに『イリュストラシオン』誌1927年3月26日号に発表された「ミカドの葬儀」がある<sup>2)</sup>。離日直前に書かれた「ミカドの葬儀」は、クローデルが日本で執筆した一連のテキストのなかでどのように位置づけられるのであろうか。モーリス・パンゲは、日本を直接的な題材とするこれらのテキスト群を、「ルポルタージュ型テキスト」、「インスピレーション型テキスト」、「即興的註解型テキスト」の3種類に分類している。「ルポルタージュ型テキスト」は、さらに「出来事の報告、情勢の分析」を目的とするものと、「日本文化の特定の側面について説明、解釈を施したエッセイ」とに分かれるが、パンゲは「ミカドの葬儀」は前者に該当すると明言している<sup>3)</sup>。たしかに、このテキストが大正天皇の大喪儀、より正確に言えば、1927年2月7日に行われた「斂葬の儀」第1日目の「葬場殿の儀」という「出来事」について報告していることは疑いようもない。しかし「ミカドの葬儀」を単なる「報告」とするパンゲの捉え方には、このテキストのもつ意義の

十分な理解を妨げる危険性が潜んではまいか。「葬場殿の儀」の「報告」という役割が意識されているテキストとしては、むしろ長男アンリに宛てた2月10日付の手紙を挙げる方が適切であろう<sup>4)</sup>。そこでクローデルは、儀式の次第を順にたどりながら、目にした光景をわが子に説明しているが、その筆致は客観的でありながらも、淡々とした描写が続き、どこか単調さが否めないからである。これに対し、「ミカドの葬儀」には彼自身が見たものに対する独自の解釈が散りばめられており、テキストの後半部においてとりわけその傾向が強くなる。

アンリ宛書簡で「この手紙に書いたことの一部は『イリュストラシオン』誌に掲載される」と明言されていること<sup>5)</sup>、儀式の翌々日(2月9日)の『東京朝日新聞』に「ミカドの葬儀」フランス語原文の忠実な日本語訳が掲載され、その末尾に「2月8日記」と記されていることから判断すると<sup>6)</sup>、「ミカドの葬儀」の執筆は前もって依頼されていたと考えるのが妥当であろう。また、執筆に費やされた時間がわずか1日であることを考慮すると、テキストの大まかな方向性についても予め打ち合わせられていた可能性が高い。『イリュストラシオン』誌に掲載された「ミカドの葬儀」の冒頭には、編集者による次のような紹介文が付け加えられている――

天皇の壮麗な葬儀に外交団員全員と共に参列したポール・クローデル氏は、この勇壮な儀式が迎えた最後の局面について自らが受けた印象を、本誌の読者のために特別に書き留めておいた。このわずか1頁のなかに、画趣と考察とが両立されている。<sup>7)</sup>

「画趣」と「考察」の両立という方針が、作家自身の意図によるものか、編集者からの要求に沿ったものかは判断しかねるが、いずれにしてもこの紹介文は「ミカドの葬儀」に込められた意図を見事に要約しているのではないか。カトリック教徒のクローデルにとって、神道の祭儀として行われる葬場殿の儀は物珍しい光景の連続であっただろう。しかし彼はそこに「画趣」を見出すことに満足せず、何らかの「考察」を引き出したのである。この点において「ミカドの葬儀」は単なる「出来事の報告」にとどまらぬ射程をもつと言える。では、このテキストではいったい何が「考察」されているのか。そして、葬場殿の儀への参列によって得られた「印象」は、それまでの日本滞在を通して形成されたクローデルの日本観とどのような関係を取り結んでいるのか。

本稿では、「ミカドの葬儀」において重要な概念とされている「崇敬」と「清

浄」について、クローデルの他のテキストと比較しながら、その意味を明らかにする。そのうえで、大喪儀への参列をきっかけとして、彼の日本観がどのような推移・深化を遂げたのかを示す。まず、代表的な日本文化論である「日本人の魂へのまなざし」で論じられている「崇敬」の概念を分析する。次に、大喪儀への参列を通して新たに発見された「清浄」の概念について検討する。さらに、この「清浄」の概念が天皇の死といかに結びついているかを考察する。最後に、以上の分析をふまえ、大喪儀への参列が作家の日本観にいかなる影響を与えたのかについて論究する。

### 1. 「日本人の魂へのまなざし」における「崇敬」の概念

前述したとおり、「ミカドの葬儀」は葬場殿の儀の翌日である2月8日に執筆されたとみて間違いない。とはいえ、クローデルは一气呵成にこのテキストを書き上げたわけではない。彼は葬儀の印象を自らの日記に書き留めている。この記録は、「ミカドの葬儀」と内容が大部分重複していることから、「ミカドの葬儀」執筆のために用意された、謂わば「取材メモ」であった可能性がきわめて高い。アンリ宛書簡によると、クローデルが儀式参列を終えて大使館に戻ったのは7日深夜であった<sup>8)</sup>。おそらく帰宅後すぐにこの「取材メモ」をまとめ、翌日それに基づいて「ミカドの葬儀」を執筆したのであろう。とはいえ、「ミカドの葬儀」が読者の存在を明確に意識したテキストであるのに対し、日記は単なる備忘録に過ぎない。それゆえ記述対象が同一であっても、その書かれ方は大きく異なっている。だが、そのような差異こそが、我々が問題としている「考察」の内実を明かすものであるのもまた事実である。

クローデルは「日本では、清浄の概念は敬虔の概念と同じくらい重要である。そのことについて全く強調されてこなかったのは奇妙だ」<sup>9)</sup>と日記に書いているが、この箇所は「ミカドの葬儀」において次のように書き直されている――

かつて私は日本人の魂にかんする研究を著し、その本質的な特徴は崇敬であろうと考えた。私はそこに清浄の概念を付け加えるべきであった。清浄の概念こそ、神道の道徳そのものであり、これについてはいかなる民族も及ぶことがない。<sup>10)</sup>

「清浄」と「崇敬」という2つの概念の重要性は、日記と「ミカドの葬儀」の双方で言及されているが、前者から後者が生成する過程で2つの変化が生じてい

ることを指摘しておこう。ひとつ目の変化は、自己参照が行われていることである。クローデルが参照している「日本人の魂にかんする研究」とは、1922年（大正11年）8月に日光で行われた講演「日本の伝統とフランスの伝統」をもとにして<sup>11)</sup>、翌1923年（大正12年）に発表された「日本人の魂へのまなざし」を指す。さらに、もうひとつの変化として、日記では単に「崇敬」と「清浄」が並列されているのに対し、「ミカドの葬儀」では「崇敬」に「清浄」の概念を「付け加えるべきであった」と記されていることが挙げられる。以上2つの変化は、互いに密接に関わっていると言ってよい。クローデルは「ミカドの葬儀」において、「崇敬」の概念がすでに「日本人の魂へのまなざし」で検討された点を明確にすると同時に、「清浄」の概念を、そこに付け加えられるべき新しい発見と位置づけているのである。

「清浄」の概念については後ほど検討することにして、ここではまず「日本人の魂へのまなざし」において「崇敬」がどのように定義されているのかを確認しよう――

したがってそのとき、私は生命を前にしたときのとりわけ日本的な態度を理解したのです。それは〔…〕私が畏敬、崇敬と呼ぶものです。すなわち、知性によって到達できない優れたものを自然と受け入れること、私たちを取り巻く神秘の前で個性の存在を小さくすること、礼儀や慎重さを要するものが私たちの周りに存在するという感覚をもつことです。日本がカミの国と呼ばれてきたのも理由のないことではありません。<sup>12)</sup>

まず、「知性によって到達できない優れたもの」、すなわち知性によっては捉えきれないものが存在するという事実を受け入れる。次に、そうした「神秘」を前にして、個性を「小さくする」。さらに「神秘」が礼儀や慎重さを要するもの」という認識をもつ。このような一連の心の動きを、クローデルは「畏敬」や「崇敬」と呼ぶ。さらに、「畏敬」や「崇敬」の感情が向けられる対象のことを、「カミ」と名指すのである<sup>13)</sup>。

ここで「カミ」と呼ばれているのは一種の超自然的な存在である。しかし、それは自然に対して超越的な位置に存在するのではなく、自然に内在するという性質をもつ。クローデルは「皆さんの宗教は、現在に至るまで、超越的な存在を信仰するものではありませんでした」と述べているが<sup>14)</sup>、「皆さんの宗教」と呼ばれているのは、まさしく「カミ」に対して「畏敬」「崇敬」の念を向ける

ことに外ならない。彼は、日本人が身の回りの自然物や生物に対して「注意」や「感謝」を向けたり、動物を供養したりすることに着目し、その原因を「カミ」に求めるのである――

並外れて大きな木や独特な形をした岩がしめ縄で飾られているのを目にすることはきわめて頻繁にあります。しめ縄によって、木や岩はカミの事物のひとつに数えられ、訪れる人々がそれらに対し払う注意や、その存在に対して抱く感謝のしるしが示されるのです。家族同然に親しい動物が死を迎えたときには、寺に連れて行き、僧侶に念仏を唱えてもらいます。<sup>15)</sup>

このような考え方は一種のアニミズムとして捉えることができるだろう<sup>16)</sup>。「崇敬」は、超自然的な力へ直接向けられるのではなく、そういった力が宿るとされる「生物や事物」に対して向けられるとクローデルは考える<sup>17)</sup>。したがって、「カミ」そのものは決して現前することがなく、目に見える自然に対して向けられる「崇敬」の念を通してしか「カミ」の存在は認識されえないと言える。

## 2. 「清め」と「崇敬」

「崇敬」と並んで重要とされている「清浄」概念の検討に移ろう。そのための手がかりも、日記と「ミカドの葬儀」の比較により得ることができる。葬場殿の儀当日、東京は厳しい寒さに見舞われており、参列者のひとりであるクローデルもこの寒さには強い印象を覚えた。日記には「酷い寒さであるが、外套を脱がなくてはならない。私は半ば死んでしまったかのようで、全身が震える」という一節が認められ<sup>18)</sup>、彼が寒さから自らの死さえも連想したことが分かる。

寒さにかんする記述は「ミカドの葬儀」にも存在するが、そこで問題となっているのは、もはや自分自身が感じた寒さではない。クローデルは寒さと死との結びつきに象徴的な意味を見出し、それを手がかりに天皇の死という出来事を解釈しようとしているのではあるまいか。儀式の次第を<sup>てみじか</sup>手短かにまとめた後、彼は次のように述べる――

私にとって、すべては清浄と冷たさという印象に要約される。

かつて私は日本人の魂にかんする研究を著し、その本質的な特徴は崇敬であろうと考えた。私はそこに清浄の概念を付け加えるべきであった。清浄の概念こそ、神道の道徳そのものであり、これについてはいかなる民族も及ぶことがない。

死そのものが至上の清めであるかのようなのである。この点からすれば、帝を埋葬するための屍衣としては、雪に覆われた大地の上に被せられる、この凍えた、満天の星が輝く夜以上にふさわしいものはないように思える。<sup>19)</sup>

大正天皇の亡骸が「雪に覆われた大地」として、そしてその身体を覆う屍衣が「凍えた、満天の星が輝く夜」として比喩的に表現されている。クローデルは、自らが感じた死と寒さの結びつきを大正天皇にも見出しているが、特筆すべきなのは、そこに「清浄」という第3の要素が付加されていることである。死が「至上の清め」として捉えられ、埋葬の光景に「清浄」が見出されている<sup>20)</sup>。つまり、葬儀とは死という「清め」が実行された状態を意味するのであり、その状態が「清浄」と呼ばれているのである。

ここでは「清浄」が「神道の道徳そのもの」と述べられているが、日記にも「神道とは、清めの総体でしかない。最も古い文学は清めの祝詞である」<sup>21)</sup>という記述が認められる。このことから、この「清め」が神道における「禊」や「祓」を指すことは明白であろう。じっさい、「日本人の魂へのまなざし」執筆にあたってクローデルが参照した書物には、神道における「清め」にかんする記述が存在している<sup>22)</sup>。

「日本人の魂へのまなざし」で、クローデルは「清め」について次のように言及している――

日本の伝統を見出すには、[...] 我々の周りで抗い難く繰り返されるこのコンサートに耳と目を開きさえすればよいのです。そこにそれぞれの楽器と声を順番に合わせていくことが、各世代の務めなのです。

このコンサートに耳を傾けましょう。しかし、それを聞くには、沈黙することから始めねばなりません。音楽は、雑音が止んだときにしか始まりません。我々の内にある、漠然とした意志や言葉の交じり合ったざわめきを捨て去りましょう。もし私が皆さんの国の田舎を巡礼する者であったなら、古い祝詞かなにかを頭上で唱えてもらい、清めと瞑想を授けてくれるあの蠅叩きのようなものの祝福を受けるよい機会かもしれません。<sup>23)</sup>

「日本人の魂へのまなざし」は、「私が願うのは [...] 皆さんの国歌の言葉にあるように、人間と大地の平和な結びつきが何世紀にもわたって『巖の苔のように』続くことです」と締めくくられる。このことから分かるように、クローデルが日本の本質として見出したのは、人間と自然との間に育まれた「一体性 (com-

munion)」、すなわち「人間が自然の一員となる」「人間と自然とが同時に生きている」という状態であり<sup>24)</sup>、それが「コンサート」と呼ばれているのである。こうした状態を生み出しているのが、「崇敬」という宗教的感情であることは言うまでもない。クローデルは宗教の目的が「永続的な事物に対して、精神を謙遜と沈黙の態度に置く」ことにあると述べる<sup>25)</sup>。「知性によって到達できない優れたものを自然と受け入れること」、「私たちを取り巻く神秘の前で個性の存在を小さくすること」、「礼儀や慎重さを要するものが私たちの周りに存在するという感覚をもつこと」と説明される「崇敬」は、まさしく「謙遜」を前提として成立している感情だと言えるだろう。同時に、そこには「沈黙」が必要なのである。「雑音」や「漠然とした意志や言葉の交じり合ったざわめき」は、ある種の受動性によって特徴づけられる「崇敬」の感情とは対極にあり、「沈黙」によりそれらを消し去らねばならない。クローデルは「祝詞」と「蠅叩き」、すなわち御幣によってもたらされる「清め」を「崇敬」の感情を生じさせるために必要な準備として理解しているのである。

### 3. 本質としての「天皇」

「日本人の魂へのまなざし」における「清め」が雑念を払い「沈黙」することであったのに対し、「ミカドの葬儀」における「清め」とは、すなわち「死」である。しかし、これは一見するときわめて奇妙な発想だと言えるだろう。神道において死は穢れとみなされ、クローデル自身もそのことを知っていた可能性が高いからである<sup>26)</sup>。そこで、この文脈で問題とされている「死」が、正確には「天皇の死」だという点に着目する必要があるだろう。彼が「天皇」なる存在をいかに捉えていたのか、その手がかりとなるのが1926年8月頃に執筆された「明治」というテキストである――

日本では、天皇は魂のように存在している。常に存在し持続するものである。天皇がどのようにして始まったのかは実のところ誰にもわからないが、終わることがないだろうということはわかっている。天皇に何か特別な活動をさせるということ是不適切であるし、また不敬でもあろう。天皇は干渉せず、国民の諸事に積極的に口を出すことはない。しかし、誰もがわかっているのだ。もし天皇がいなければ、物事は同じように進まないだろうし、すべては調子が狂い、継ぎ目が外れて壊れてしまうだろうということ。<sup>27)</sup>



「天皇」という存在のあり方が「魂のよう」であり「常に存在し、持続する」という発想は、身体が有限かつ流動的なものなのに対し、魂は身体が死を迎えてもなお不滅だという対立関係を下敷きにはしていると考えられる<sup>28)</sup>。つまりクロードルは、天皇の存在の様態を「魂」に擬えることにより、身体を有した実体としての天皇——ここでは大正天皇＝嘉仁——と、機能としての天皇とを別物して捉えているのである。さらに、天皇は何らかの活動を積極的に行うものではないが、仮に存在しなければ国としての有り様が狂ってしまう。その意味で、天皇は日本という国の「継ぎ目」と呼ぶべき存在であるとクロードルは考えている。これは、ある意味で今日の象徴天皇制を先取りする発想とも言えよう<sup>29)</sup>。以上の2点が彼の考える天皇の本質であるが、それらは互いに不可分なものとして見てよいだろう。国を不滅のものとして保ち続ける「継ぎ目」としての役割は、天皇という機能が「持続」し続けなければ果たしえないのである。

葬場殿の儀のなかでもとりわけ強い関心が向けられているのが、祭壇に供物を捧げる儀式である<sup>30)</sup>。その意味は「ミカドの葬儀」のなかで次のように解釈されている——

私が特に感銘を受けたのは、補佐役の祭官たちが厳かな様子で次々と食物を手渡していき、祭壇に供え、同様のことをして元に戻す、という儀式の部分である。世代から世代へと受け継がれる生命の象徴を、死者と生者の交わりの象徴を見るべきだろうか。<sup>31)</sup>

祭官たちが次々と手渡していき、祭壇に供えられ、ふたたび下げられる食物は、「世代から世代へと受け継がれる生命」を象徴しているのではないかとクロードルは考える。葬儀の場において「生命」を見出すという一見逆説的な考え方も、この受け継がれる「生命」が天皇という機能を意味していると考えれば納得できよう。天皇という存在は、常に具体的な人間によって担われる。例えば、大正時代においては天皇は嘉仁という人間と完全に重なっているが、嘉仁が死を迎えたとき、裕仁という別の人間が天皇という存在を担うことになる。したがって、大正天皇の死にも関わらず、天皇という存在は死に絶えることがないのである。そして、そのことが最も意識されるのは、ある天皇が死を迎え、その機能が継承されるときに外ならない。「常に存在し持続する」ものとしての「天皇」は、死を通して浮かび上がると言えるのであり、それは永遠に滅びることのない「生命」なのである。

#### 4. クローデルの日本観の推移・深化

クローデルは、大正天皇の死が「常に存在し持続する」機能としての「天皇」を現前させたと考えたが、なぜ大正天皇の死を「清め」と捉え、その葬儀に「清浄」を見出したのかはいまだ判然としない。またすでに指摘したとおり、彼にとって「清浄」は「崇敬」に「付け加える」べきものであった。その意味では、葬場殿の儀への参列を契機として「日本人の魂へのまなざし」で表明されていた日本観は修正されたと見るべきだろう。それは、いかなる修正であったのか。

「日本人の魂へのまなざし」において提示された文学観や芸術観は、それ以前のクローデルの考え方とは大きく異なっている。来日後間もない1922年1月15日に行われた講演「フランス文学について」は次のように始まる――

文学の第一の目的とは、何よりもまず、絶えず流れていく状態にあるこの世界を固定することです。それはつまり、我々の手を逃れるこの流動的な環境を、精神が時間をかけて観察することのできる恒久的な一枚の絵画に置き換えることなのです。<sup>32)</sup>

クローデルにとって現実とは流動的なものであり、そのままでは把握することができない。そこでこの現実にも不動性を与える必要があり、文学はその手段として位置づけられる。現実から流動性を取り去って固定し、あたかも「一枚の絵画」のように提示することが「文学の第一の目的」なのである。

しかしこの考え方は、日本滞在を経て大きく修正されることになる。「日本人の魂へのまなざし」に読まれる次のような一節は、日本との接触がクローデルの発想に本質的な変化をもたらしたことを物語っている――

〔…〕永遠なるものを表現するために、あなた方の国の偉大な芸術家は――しばしば僮侶でもあったのですが――象徴や神々だけでなく、口にするることのできない源泉から発せられる震えの、まさしく最も壊れやすく儂い、さらには最も新鮮なものを描いたのです。〔…〕事物は、移ろいゆく存在でありながらも、生き生きとして死ぬことがなく、今後は減びることのないものとして我々の前にあるのです。<sup>33)</sup>

日本の芸術を賛美するクローデルは、その特徴が流動的なもの、しかもその「最も新鮮なもの」を描くことによって「永遠なるもの」を表現する点にあると考える。「フランス文学について」と同様、ここでもまた不動性を生み出すことに力点が置かれているが、他方この「永遠なるもの」においては、現実のもつ流

動的側面は排除されぬまま残されている。「移ろいゆく存在でありながらも、生き生きとして死ぬことがない」というのは、逆説的ではあるが、現実の流動的側面を残したまま不動性を与えることに外ならない。このテキストでは、流動性と不動性の二項対立という基本的な図式は維持されるものの、前者を排することによって後者を生じさせるというモデルの枠内にはもはや収まっていないのである。このような発想の転換を生み出す契機となったのが、クローデルが日本の宗教に見出したアニミズム的側面であるのは疑いようがなく、じっさい、「あなた方の国の芸術に秘められた力を生み出しているのは、この敬虔なる畏敬の感情、和やかな慈しみに包まれて被造物全体と交わる感情なのです」<sup>34)</sup>という一節が存在する。自然に内在する超自然的な力に対して向けられる「崇敬」によって流動性と不動性は両立されているのであり、その意味で、人間と自然との間に築かれた調和的な関係こそがこの両立を象徴しているのである。

さらにクローデルは、この自然と人間の関係を「愛国心」と結びつけて理解し、「日本人の愛国心とは、とりわけ国土との一体感、国土が我々に見せる表情を前にしたときの深い瞑想のことであるように私には思えます」<sup>35)</sup>と述べる。この一節は、「崇敬」の感情が「天皇」に関わることを示唆している。というのも、大正天皇の葬儀は「宗教的かつ愛国的な儀式」<sup>36)</sup>と位置づけられているからである。この儀式がクローデルの目に「愛国的」なものとして映ったのは、「天皇」という存在が日本という国の「継ぎ目」の役割を担っているからに外ならず、そうした役割は「天皇」が流動性と不動性を両立させていることによって可能となる。「明治」のなかの一節を読もう――

天皇は、そのままであり続けると同時に、自分以外のものに対しては変化することを強いる。すなわち、移り変わる時と、根源に結びついた時間とを通して、国に対し、死に絶えてはならないという義務を永遠に課すものなのである。<sup>37)</sup>

すでに確認したとおり、「天皇」は生々流転する万物のなかで唯一変化を免れ、存在し続けることができるのだが、重要なのは自ら以外に対しては「変化することを強いる」という点である。それによって「天皇」は、国全体に対して「死に絶えてはならないという義務」を課しているとクローデルは言う。つまり国全体が変化を続けながらも不動性を獲得することを、言い換えれば、儂いものが儂さを保ったまま存在し続けることを可能にしているのである。移ろいゆく

諸存在を束ね、国全体に不動性を与えているという意味で、「天皇」という存在はまさしく日本の「継ぎ目」たりえてはいまいか。

「そのままであり続けると同時に、自分以外のものに対しては変化することを強いる」ことなど、定義上人間には到底不可能なことであり、その意味でクローデルにとっては「天皇」もまた一種の超自然的な存在であった。このように考えると、彼にとって「カミ」と「天皇」は本質的に同じものであったとすら言えるだろう。しかし、流動性と不動性の両立を可能にする超自然的な力の在処を「天皇」に限定した場合、「日本人の魂へのまなざし」で述べられていたような、あらゆるものに宿り得る「カミ」に「崇敬」の念を向けるのとは異なった状況が生じるとと思われる。「日本では、天皇は魂のように存在している」と述べる作家にとって、「崇敬」の念が向けられるべき対象は、個別具体的な天皇ではなく、その背後に存在する本質としての「天皇」だったはずである。しかしながら「崇敬」の対象としての「天皇」は、人間としての身体を備えた天皇と常に二重写しにされている<sup>38)</sup>。それゆえ、国の「継ぎ目」としての力自体と、その力を有している人間、すなわち個別具体的な天皇とを切り離すことは、現実的にはきわめて難しい問題である。

クローデルにとって、この二重写しの状態を解消させ、有限な肉体にとらわれない本質としての「天皇」だけを現前させるのが「死」だったのではないだろうか。大正天皇が死を迎えたとき、そこに存在するのは「崇敬」を受ける対象としての「天皇」、すなわち機能としての「天皇」のみであった。この意味でクローデルは、大正天皇の葬儀に「清浄」を、すなわち「崇敬」の感情を生じさせるための準備たる「清め」が達成された状態を見出したのである。「ミカドの葬儀」は次のように閉じられる――

私が目の当たりにしたのは、天皇、皇族、高位高官から最下層の臣民に至るまで、日本全体を挙げて死に対して敬意を表し、去り行く君主に別れを告げる様であった。これが私が日本について抱いた最後の印象である。これ以上に美しく、荘厳な印象はもたえなかつただろう。<sup>39)</sup>

この一節には、たしかに国民全体の哀悼の姿に接したクローデルの率直な感動が表れている。長男アンリ宛の書簡にも同じ趣旨の記述がある<sup>40)</sup>。しかしクローデルが受けた「印象」はそれだけではない。彼はこの儀式が「去り行く君

主に別れを告げる」ためのものであると同時に、「死に対して敬意を表」するものだと理解している。ここで敬意を表する対象が「死者 (*le mort*)」ではなく「死 (*la mort*)」とされていることはきわめて重要である。「死に対して敬意を表」するということは、本質としての「天皇」を現前させ、それに対し「崇敬」の念を向けることを可能にする「清め」を行うことに外ならない。作家が抱いた「最後の印象」は、国民全体、すなわち一切の「移ろいゆく存在」がこの葬儀に加わり、大正天皇の「死」を受け入れている光景であった。彼はそこに国の「継ぎ目」としての「天皇」の本質が表れていると考え、それがゆえに大正天皇の葬儀に「清浄」を見出したのではないだろうか。

## 結 語

本稿では、「天皇」という存在にクローデルが見出した役割に着目することによって、「ミカドの葬儀」において重要なものとされている「崇敬」と「清浄」の概念の関係を明らかにし、斂葬の儀への参列を経て彼の日本観がどのように推移・深化したかを跡づけた。「日本人の魂へのまなざし」においてクローデルが日本という国の本質として把握したのは、「崇敬」の念によって人間と自然とのあいだに調和的な関係が築かれ、流動性と不動性が矛盾なく両立しているという点であった。こういった考えが彼の日本観の核をなしていることは疑いようもない。しかし、矛盾なき両立を可能にしている超自然的な力に対する理解は、わずか数年の日本滞在でありながらも、作家の身の内で確実に推移・深化を遂げていた。この不可思議な力の在処を彼は「天皇」という存在に限定していく。そして「常に存在し持続する」と同時に国の「継ぎ目」という「天皇」の本質を初めて具体的に見出したのが、大正天皇の葬儀だったのである。そこに表れていたのは、「天皇」という存在に対して「崇敬」の念を呼び起こすために必要な状態、すなわち「清浄」であった。このとき、「清浄」は「崇敬」と並んで日本という国を理解するために必要不可欠な概念となったのである。

以上のような独自性をもつクローデルの日本観あるいは天皇観は、「日本人の魂へのまなざし」の冒頭部にあるように、未知なるものに潜む「特徴的なこと、特異なこと、時に奇妙なこと」<sup>41)</sup>の発見を自らに課した彼ならではのものと言えよう。しかし、かかる発見も無から生じるわけではなく、そこには彼なりの解釈格子が存在したはずである。その正体を突き止めるのは容易ではないが、

ひとつの可能性として考えられるのが、キリスト教的世界観である。例えば、「日本人の魂へのまなざし」と「ミカドの葬儀」で共通して使用されていた語に「交わり (communion)」があるが、そこにはキリスト教文化の刻印を見て取らずにはいられない。本稿で明らかにしたクローデルの日本観が彼のカトリック的思考とどのように「交わる」のか、稿を改めて論じる必要があるだろう。

## 註

- \*) 本稿は「JSPS 科研費：課題番号 20K12991」の助成を受けた研究の一部である。
- 1) Paul CLAUDEL, *Journal*, éd. François VARILLON et Jacques PETIT, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», t. I, 1969, p. 742 ; Télégramme n° 75, Tokyo, 2 décembre 1926, Archives du ministère des Affaires étrangères, La Courneuve, Dossier personnel de Paul Claudel.
  - 2) Paul CLAUDEL, «Les Funérailles du Mikado», *L'Illustration*, 26 mars 1927, p. 291.
  - 3) Maurice PINGUET, «Paul Claudel exégète du Japon», *Études de Langue et Littérature françaises*, n° 14, 1969, p. 3.
  - 4) Paul CLAUDEL, *Lettres à son fils Henri et sa famille*, Lausanne : L'Âge d'Homme, 1990, pp. 46-48.
  - 5) *Ibid.*, p. 48.
  - 6) 「世界にたぐひなき大喪の御儀に列して——クローデル大使の印象記」, 『東京朝日新聞』朝刊, 1927年2月9日, 3頁。
  - 7) CLAUDEL, «Les Funérailles du Mikado», art. cité, p. 291.
  - 8) CLAUDEL, *Lettres à son fils Henri et sa famille*, *op. cit.*, p. 48.
  - 9) CLAUDEL, *Journal*, *op. cit.*, p. 758.
  - 10) Paul CLAUDEL, *Œuvres en prose*, éd. Jacques PETIT et Charles GALPÉRINE, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1965, p. 1149.
  - 11) Dépêche n° 132, Claudel à Poincaré, Tokyo, 31 août 1922, Archives du ministère des Affaires étrangères, La Courneuve, E-Asie, Japon/44. なお、「日本の伝統とフランスの伝統」から「日本人の魂へのまなざし」への書き換えについては、次の拙稿を参照——学谷亮「滞日期ポール・クローデルにおける批評と外交の接点——「日本の伝統とフランスの伝統」をめぐって」, 『フランス語フランス文学研究』第119号, 2021年8月, 225-242頁。
  - 12) CLAUDEL, *Œuvres en prose*, *op. cit.*, p. 1123.
  - 13) クローデルの「カミ」概念の着想源は、ダニエル・クラレンス・ホルトムの著作, 『近代神道の政治哲学』(Daniel Clarence HOLTOM, *The Political Philosophy of modern shinto*, Tokyo : Keio University, 1922) である。クローデルがホルトムの

- 見解をどのように自らのテキストに取り込んだのかについては、大出敦が詳細に検証している（大出敦「自然・カミ・〈闇〉——クローデルと日本のカミ観念——」、『教養論叢』第133号、2012年3月、21-47頁を参照）。
- 14) CLAUDEL, *Œuvres en prose, op. cit.*, p. 1131.
  - 15) *Ibid.*, p. 1127.
  - 16) クローデルのアニミズム的発想にかんして、アンリ・フォション『仏教美術』（Henri FOCILLON, *L'Art bouddhique*, Paris: Henri Laurens, 1921）からの影響が指摘されている。中條忍「日本の伝統とフランスの伝統」覚書、『青山フランス文学論集』第22号、2013年12月、81-82頁を参照。
  - 17) CLAUDEL, *Œuvres en prose, op. cit.*, p. 1131.
  - 18) CLAUDEL, *Journal, op. cit.*, p. 758.
  - 19) CLAUDEL, *Œuvres en prose, op. cit.*, p. 1149.
  - 20) クローデルは「埋葬する」という表現を使用しているが、厳密に言えば、これは不正確である。彼は、新宿御苑で行われた「葬場殿の儀」に参列後帰宅しており、翌日早朝より武蔵陵墓地で行われた「陵所の儀」には参列していない。
  - 21) CLAUDEL, *Journal, op. cit.*, p. 758.
  - 22) ホルトムは「清浄の重視（そこには宗教的な清めという考え方が含まれる）」を神道の特徴のひとつとして挙げている（HOLTOM, *op. cit.*, p. 85）。なおこの記述は、河野省三『国民道徳史論』第11章第2節の内容に基づき、河野の著作には「神道が最も清浄を重んずる教なることは、何人も認むるところにして、赤き心といひ、至誠（まごゝろ）といひ、若しくは正直といふも、所詮この徳とその本体を同じうす。廉潔質素を重んじ、鏡を霊視し、襖袂を貴ぶ風も、皆この精神より発せるなり」（河野省三『国民道徳史論』、森江書店、1920年、232-233頁。強調原文、旧漢字は新漢字に改変）という記述がある。また、クローデルはミシェル・ルヴォン『日本文学選』を座右の書としていたことが知られており、「日本人の魂へのまなざし」の冒頭でも、「私の仕事机を片時も離れることのない […] この素晴らしい作品集」として、同著作への言及がある（CLAUDEL, *Œuvres en proses, op. cit.*, p. 1118）。このルヴォンの著作には、神道の祭祀に用いられる祝詞のひとつである「六月晦大祓祝詞」のフランス語訳が掲載されている（voir Michel REVON, *Anthologie de la Littérature Japonaise des origines au XX<sup>e</sup> siècle*, Paris: Ch. Delagrave, 1910, pp. 25-32）。
  - 23) CLAUDEL, *Œuvres en prose, op. cit.*, pp. 1122-1123.
  - 24) *Ibid.*, p. 1132.
  - 25) *Ibid.*, p. 1127.
  - 26) ルヴォンは、「六月晦大祓祝詞」の一節に「死体に触れることは不浄（impur）であり、まして傷つけることはなおさら不浄である」という註をつけている（REVON, *op. cit.*, p. 28）。
  - 27) CLAUDEL, *Œuvres en prose, op. cit.*, p. 1196.
  - 28) この主題を扱ったクローデルの作品に、『東方の認識』所収の散文詩「分解」がある。

- そこには、「私が死ぬとき、もはや苦しめられることはないだろう。私が父と母の間に埋葬されるとき、もはや苦しめられることはないだろう。[...] 地中では、私の身体の秘蹟は消えてなくなるだろう。だがわが魂は、この上なく鋭い叫びに似て、アブラハムの体内に留まり続けるだろう」という一節が読まれ、有限な「身体」と不滅の「魂」が対比されている (Paul CLAUDEL, *Œuvre poétique*, éd. Jacques PETIT, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1967, p. 119)。
- 29) 大出敦「ミカドとギリシア クローデルと日本のカミ観念 II」, 『L'Oiseau Noir』第 17 号, 日本クローデル研究会, 2013 年 7 月, 33-34 頁。
- 30) 『大正天皇御大葬奉送誌』では次のように記述されている——「次ニ御饌ヲ奠ス 祭官副長祭官奉仕 此ノ間誦歌ヲ奉ス [...] 次ニ幣物御饌ヲ撤ス 祭官副長祭官奉仕 此ノ間誦歌ヲ奉ス」。『大正天皇御大葬奉送誌』東京市役所, 1927 年, 220 頁。
- 31) CLAUDEL, *Œuvres en prose, op. cit.*, p. 1149.
- 32) Paul CLAUDEL, *Supplément aux Œuvres complètes*, Lausanne : L'Age d'Homme, t. II, 1991, p. 106.
- 33) CLAUDEL, *Œuvres en prose, op. cit.*, p. 1129.
- 34) *Ibid.*, p. 1128.
- 35) *Ibid.*, p. 1127.
- 36) *Ibid.*, p. 1149.
- 37) *Ibid.*, p. 1196.
- 38) 大出敦は、「明治」の冒頭部分について、「クローデルは一方では現実に存在する天皇と魂としての天皇を二重写しにすることに成功している」と述べている (大出前掲論文「ミカドとギリシア」, 34 頁)。
- 39) CLAUDEL, *Œuvres en prose, op. cit.*, p. 1149.
- 40) 「天皇から最下層の臣民に至るまで 200 万人もの人々が参加し、これほどまでに秩序と品位を保って挙行される宗教的儀式は、他のどの国でも見ることはできないだろう。[...] 自分のいる場所からは何も見えないと知りながらも、雪の上に 15 時間座り、身動きひとつせず天皇を哀悼する人もいた」 (CLAUDEL, *Lettres à son fils Henri et sa famille, op. cit.*, p. 47)。
- 41) CLAUDEL, *Œuvres en prose, op. cit.*, p. 1119.